

意味にとって「客観的であること」はいかにして可能か — 認知意味論的言語観からの考察 —

岡城真代 (Masayo Okashiro)

千葉大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程

本発表では、認知意味論における言語観において、「われわれに互いに共有された、互いに理解可能なひとつの世界」の客観性がいかにして可能となるのかを概観するとともに、それを通して、意味に関して「客観性」がどのような概念として位置づけられるべきであるのかについて考察する。

現在哲学においておそらく主流でありもっともよく知られている言語観は客観主義的言語観である。そこにおいては、われわれとは独立に、記述によって事態（の価値、意味）を決定することが可能であるということが、すなわち客観的であるということだと述べられる。つまり記述と事態の間には<神の眼>的視点における対応関係があるのであり、当該言語表現の意味は（客観的に）一定の記述によって尽くされるというわけである。それに対して認知意味論的言語観では、客観主義がその客観性という点において積極的には認めていないような非命題的要素をおおいに評価する。ここでの非命題的要素とは、認知的要素であり、ゲシュタルトや世界に繰り返し現れるパターンとしての「構造」である。これらの要素は記述によって把握可能になるものではない。しかしこの「構造」こそが、われわれが**運用すること**ばの意味に多大な影響を与えていると主張するのが、認知意味論なのである。

こうした言語観では、客観主義的言語観をそのまま承けると、われわれが互いに「客観的に」共有できない要素について語ることになり、客観性を担保できる意味理論としては成立しない、ということになってしまうだろう。ところがこの認知意味論的言語観における「客観性」は客観主義的なものとはそもそもとらえ方が異なっているのである。そこではむしろ、非命題的要素であるところのゲシュタルトや構造を欠いた、客観主義的言語観では、記述された事態・対象がいかなるゲシュタルトを持つものかがわからずじまいであり、そしてだからこそ、われわれが互いにいかなる世界に生きているのかがまったく不明になってしまう、と考える。

この考えを支えるために、認知意味論では、事態と記述の関係に根ざした意味論ではなく、われわれの「事態の経験」におけるわれわれ自身の身体的な理解に根ざしたしかたでの意味論を構築していく。本発表では、この言語観を擁護する立場から、当の「客観性」を認めることによる意味論への影響と、問題点について議論していきたい。そこにおいて

さらなる意味論の広がりが見出せるのではないかと期待する。